

イメージを具現化する 実物大作品こそ

杉コレクション最大の魅力！

毎年、多数の作品が応募される中、最終選考会に選ばれた作品は、実行委員たちによって、実物大で再現される。

今回で7回目となった杉コレクション。これまで、製作された作品には、それぞれ様々な物語があった。アイデアを考える作者と、製作を担当する製作者との間で生まれる、葛藤や連帯感、本番の舞台に姿をあらわす作品がもつ不思議な魅力は、どのようにして生まれてくるのか。

全国から応募された作品は、いくつかの選考会を経て、毎年おおよそ10作品が選ばれる。選ばれた10作品は、宮崎県木材青壮年会連合会の7つの会団が手分けし、作品の製作を担当する。

昨年までは、実物の10分の1スケールの模型の製作を作者が担当し、出来上がった模型から実物大のイメージを作り上げ、それから必要な作品は設計図面を書き起こし実物大作品の製作へと進んで行く。

全国から寄せられる応募作品の中には、プロの建築家の作品もあれば、小学生や、全くの素人の作品もある。それぞれが、毎年のテーマに沿って、それぞれが思い描く作品を表現して応募してくる。当然、プロと素人の応募作品には表現力には大きな開きがある。

通常のデザインコンペの場合、「表現力で

培ったプロの知識を活用する。

たとえば、杉は、生えている場所に応じ年輪の幅が異なる。それによって乾燥時に、材の収縮率に多少の変化が出る。また、同じ杉でも、根元に近い材料と、先のほうの材料では目のつまりや年輪の入り方が異なり、やはり乾燥が進むと予想の出来ない変化が生まれる。そういったスギの特徴を全て把握した上で、それぞれの作品を表現するためには、どんな材料が必要なのかを的確に選定していく。

足りないイメージはお互いが 歩み寄り、埋めてゆく

製作担当が、初めて作品の絵を見た時点で、概ね必要な材料や作業の手順がイメージできる。

ところが、作者と打ち合わせを重ねると、相手のイメージに違和感を感じる場合もある。特に、作者が杉はおろか、木材の知識に乏しい場合、杉の特徴を説明するところから始まる。イメージにこだわる作者と、製作のプロとしての意見がぶつかり、相容れない要望に辟易することもある。作者のこだわりが、スギでは非常にむずかしいことも多く、これまでの経験では解決できない場面にぶち当たることがよくあることである。

日常の仕事ならば、設計をやり直し、可能な形に変更したり、スギでは出来ない部分に別の素材を使用したり、より合理的な方法で仕上げてゆくことが当たり前である。しかし、それを許さないのが杉コレであり、プロの技術を試される場面が非常に多い。
作者と激しくやり合った末に完成する作品

ある程度の技量を備えていない作品は、その時点で対象から外される。しかし、杉コレクションの場合は、あくまでも作者のイメージした物にこだわり同じ舞台で選考される。

稚拙な表現から、作者が作品に込めたイメージを感じ取り、作品になった場面を想像する。応募された作品は、いずれも平面で表現されたイメージのみである。プロの応募作品は、平面の中に、実に見事に立体のイメージや、作品のコンセプトがまとめられる。それに対し、素人のイメージは稚拙なスケッチに簡単なコメントだけの場合もある。

「アイデア」と「こだわり」と 「技術」のバランス

製作担当にとって最も難しいのが、作者のこだわりをいかに表現するかという点である。

言うまでもなく、杉の木は、コンクリートやプラスチックなどとは異なり、思い通りにならない材料である。しかも、生きているのである。平面や直線に見える板も、時間とともに乾燥がすすみ反りやゆがみが生じてくる。

プロの建築家による作品の場合、表現されている線には、1本1本意味があり、寸分の違いが作品のバランスを崩してしまう。

精度にこだわった作品には乾燥の進んだ材料を選び、乾燥によって生じる寸法の変化を最小限にとどめる。

それぞれの作品の、各パーツに応じ、杉のどの部分を使えばいいのか？どのくらい乾燥していれば良いのか？何年生の杉が必要か？など、適当な材料を選定するために、何十年と舞台となるのである。

は、まさしく製作担当と作者との間に出来た子どものようなものである。

最終プレゼンでは、製作担当が舞台に立つ訳でもないのだが、作者とともに緊張感が募ってくる。本番では、作品に対する思いは作者と同じであり、製作担当にとつても晴れの舞台となるのである。

今回のグランプリ作品となった「お尻合いイス」の応募時点のイメージは非常に弱々しく、表現力も稚拙な物であり、とても作品として表現されるようなものではないと誰もが考えた。ところが、イラストに添えられた母としてのメッセージが審査員の心に届き、製作者のイメージ力で作品を表現し、だれもの心にも響く作品に仕上がったのだと思う。

製作を担当した延岡木青会では、この作品のために100年生の杉を用意した。作者のイメージを出来るだけ具現化するため、何度も直接会い、打ち合わせを重ね、お母さんが愛おしむ子どものお尻の表現に微調整を重ね、微妙な曲線を実際に座りながら、感触を確かめながら仕上げていった。

杉コレクションの作品が持つ魅力は、完成に至るまでに、複数の人々の「絆」や「思い」が重なっているからだと思う。
毎年、最終審査には非常に時間がかかる。どの作品にも捨てがたい味わいと感動の物語が込められており、簡単には選定できないのが本場の所である。
それぞれの作品にはどのような苦労が重なっているのか。作者と製作者とのやりとりに思いを巡らせながら、作品にふれてみるとその魅力はいつそう味わい深くなる。

